話題

X線自由電子レーザー, SACLA のコミッショニングと 実現された光源性能

田中 均*1·Arnaud Amselem *2·青柳 秀樹*2·安積 隆夫*1·浅野 芳裕*1·安積 則義*2 石井 健一*³·石井 美保*²·石橋 一憲*³·糸賀 俊朗*²·稲垣 隆宏*¹·犬伏 雄一 井上 忍*3· 惠郷 博文*2· 大島 隆*1· 大竹 雄次*1· 大橋 治彦*2· 大端 通*2· 小竹 拓也*3 小野 峻*1·甲斐 智也*3·籠 正裕*2·亀島 敬*2·家納 寛*3·木村 洋昭*2·桐原 清道 明男*2.工藤 統吾*2.小林 和生*2.小林 利明*2.近藤 力*2.後藤 俊治*2.呉 樹奎*2 櫻井 辰幸*2·佐治 超爾*2·佐藤 尭洋*1·Xavier Marechal^{2#}·白澤 克年^{1#}·城地 保昌*2 杉本 崇*2·鈴木 伸介*2·清家 隆光*2·高橋 直*2·武部 英樹*2·竹下 邦和*2 田尻 泰之*3・玉作 賢二*1・田中 信一郎*3・田中 隆次*1・田中 良太郎*2・張 超*2 塚本 宜史*3·富樫 格*2·渡川 和晃*1·富澤 宏光*2·登野 健介*2·永園 充*1 成山 展照*2·初井 宇記*1·花木 博文*2·原 徽*1·長谷川 太一*3·長谷川 照晃*1 広野 等子*2·備前 輝彦*2·深見 健二*2·福井 達*1·古川 行人*2·細田 直康*2 前坂 比呂和*1·前田 大輔*3·前田 雄亮*3·益田 邦和*3·町田 武彦*3·松井 佐久夫*2 增田 剛正*2·松下 智裕*2·松原 伸一*2·松本 崇博*2·南 潤一朗*3·森永 拓也*3 矢橋 牧名*1·柳田 謙一*2·山鹿 光裕*2·山下 明広*2·山下 雅史*3·山本 龍*3 新竹 積^{1#}·北村 英男*^{1,2}·熊谷 教孝^{1#}·石川哲也*¹

Commissioning of Japanese X-ray Free Electron Laser, SACLA and Achieved Laser Performance

Hitoshi TANAKA^{*1}, Arnaud AMSELEM^{*2}, Hideki AOYAGI^{*2}, Takao ASAKA^{*1}, Yoshihiro ASANO^{*1}, Noriyoshi AZUMI^{*2} Kenichi ISHII^{*3}, Miho ISHII^{*2}, Norikazu ISHIBASHI^{*3}, Toshiro ITOGA^{*2}, Takahiro INAGAKI^{*1}, Yuichi INUBUSHI^{*1} Shinobu INOUE *3, Hiroyasu EGO *2, Takashi OHSHIMA *1, Yuji OTAKE *1, Haruhiko OHASHI *2, Toru OHATA *2 Takuya OTAKE^{*3}, Shun ONO^{*1}, Tomoya KAI^{*3}, Masahiro KAGO^{*2}, Takashi KAMESHIMA^{*2}, Yutaka KANO^{*3}, Hiroaki KIMURA^{*1,2} Yoichi KIRIHARA^{*1}, Akio KIYOMICHI^{*2}, Togo KUDO^{*2}, Kazuo KOBAYASHI^{*2}, Toshiaki KOBAYASHI^{*2}, Chikara KONDO^{*2} Shunji GOTO^{*2}, Shukui WU^{*2}, Tatsuyuki SAKURAI^{*2}, Choji SAJI^{*2}, Takahiro SATO^{*1}, Xavier M. MARÉCHAL^{2#} Katsutoshi SHIRASAWA^{1#}, Yasumasa JOTI^{*2}, Takashi SUGIMOTO^{*2}, Shinsuke SUZUKI^{*2}, Takamitsu SEIKE^{*2}, Sunao TAKAHASHI^{*2} Hideki TAKEBE^{*2}, Kunikazu TAKESHITA^{*2}, Yasuyuki TAJIRI^{*3}, Kenji TAMASAKU^{*1}, Shinichiro TANAKA^{*3}, Takashi TANAKA^{*1} Ryotaro TANAKA^{*2}, Chao ZHANG^{*2}, Yoshifumi TSUKAMOTO^{*3}, Tadashi TOGASHI^{*2}, Kazuaki TOGAWA^{*1} Hiromitsu TOMIZAWA^{*2}, Kensuke TONO^{*2}, Mitsuru NAGASONO^{*1}, Nobuteru NARIYAMA^{*2}, Takaki HATSUI^{*1} Hirofumi HANAKI^{*2}, Toru HARA^{*1}, Taichi HASEGAWA^{*3}, Teruaki HASEGAWA^{*1}, Toko HIRONO^{*2}, Teruhiko BIZEN^{*2} Kenji FUKAMI^{*2}, Toru Fukui^{*1}, Yukito FURUKAWA^{*2}, Naoyasu HOSODA^{*2}, Hirokazu MAESAKA^{*1}, Daisuke MAEDA^{*3} Yusuke MAEDA^{*3}, Kunikazu MASUDA^{*3}, Takehiko MACHIDA^{*3}, Sakuo MATSUI^{*2}, Takemasa MASUDA^{*2}, Tomohiro MATSUSHITA^{*2} Shinichi MATSUBARA^{*2}, Takahiro MATSUMOTO^{*2}, Junichiro MINAMI^{*3}, Takuya MORINAGA^{*3}, Makina YABASHI^{*1} Kenichi YANAGIDA^{*2}, Mitsuhiro YAMAGA^{*2}, Akihiro YAMASHITA^{*2}, Masafumi YAMASHITA^{*3}, Ryo YAMAMOTO^{*3} Tsumoru SHINTAKE^{1#}, Hideo KITAMURA^{*1,2}, Noritaka KUMAGAI^{#1}, Tetsuya ISHIKAWA^{*1}

^{*1} 独立行政法人理化学研究所 播磨研究所 RIKEN, RIKEN Harima Institute

^{*&}lt;sup>2</sup> 財団法人高輝度光科学研究センター JASRI

^{*&}lt;sup>3</sup> スプリングエイトサービス SPring-8 Service, Co. Ltd.

 [#]現所属: Loyola University Maryland (X.M.M.);
 沖縄科学技術大学院大学 OIST (K.S.& T.S.);
 財団法人高輝度光科学研究センター JASRI (N.K.)
 (E-mail: tanaka@spring8.or.jp)

Abstract

After 8 months of beam commissioning of **S**Pring-8 **A**ngstrom **C**ompact free electron **LA**ser, SACLA reached the primary target performance, i.e., a shortest laser wavelength of ~ 0.6 Angstrom and a laser pulse energy value of submJ at a wavelength of 1.2 Angstrom. This success was due to the following four factors; (1) performance estimation of each component of SACLA required for the target laser performance and its achievement, (2) elaboration of beam diagnostics and control systems enabling precise accelerator and undulator tuning, (3) a rational and strategic commissioning plan, (4) most adequate response to various accidental events during the beam commissioning period. This article, in order to light up the above four factors leading us to the success, starts with the features of SACLA and critical tolerance for the sub-system components, and then, explains our approach to achieve the target laser performance and how the beam commissioning of SACLA proceeded. At last, the article summarizes the present laser and operational status.

1. はじめに

SPring-8 Angstrom Compact free electron LAser, SACLA のビームコミッショニングでは、8ヶ月という 短期間で、レーザー最短波長 0.6 Å の達成並びに波長 1 Å における sub-mJ のレーザーパルスエネルギー生成 という目標を実現できた.この成功は、(1) レーザー 性能達成を可能とする機器の必要性能評価とその実現, (2) 精密電子ビーム、精密アンジュレータ調整を視野 に入れた診断・制御系の整備、(3) 合理的かつ戦略的 な調整計画、(4) そして調整時に遭遇する様々な問題 への適切な対応、これらが一つ一つ地道に積み上げら れてきた結果である.

本記事では、コミッショニングの成功を支えたこの 4つの部分を浮き彫りにするため、SACLAのシステ ムとしての特徴とクリティカルな機器性能に関して初 めに言及し、目標レーザー性能を得るためにとったア プローチと SACLAのコミッショニングが実際どのよ うに進展したのかを述べ、最後に現状の光源性能に関 してまとめることにする.SACLAの経験が今後の新 たなプロジェクト遂行の参考になれば幸いである.

コンパクトX線自由電子レーザーSACLA -SACLA 特有の機器及びシステム性能 の特徴-

SACLA は SPring-8 Compact SASE Source (SCSS)¹⁾ というコンセプト(以降, SCSS コンセプト)に立脚し, 高性能の X 線自由電子レーザー(XFEL)を可能な限り 小さな施設規模で実現することを目指した世界初のコ ンパクト XFEL 施設である.SSCS コンセプトに基づ く施設規模縮小のシナリオを図1に模式的に示す. コンパクト化の要は,相対的に低いエネルギーの電子 ビームを用いて波長の短い X 線を発生させることであ るが,これを可能にするのが短周期真空封止アンジュ レータ²⁾である.アンジュレータ周期長が半分になれ ば同じ波長の X 線が7割のビームエネルギーで得られ ることは教科書を見れば明らかであろう.レーザー生



図1 SACLAの採用した XFEL 施設規模縮小のシナリオ.

成で重要な点は、短い磁石長で十分に電子を曲げ、高 いレーザー利得が得られる強磁場を実現することであ る. 真空封止アンジュレータは、磁石列を真空槽中に 入れ電子ビームに磁極を近づけることでそれを可能に する. これに加えて、相対的に低い目標エネルギーまで、 常伝導 C-band 高勾配加速システム³ で効率的に電子 ビームを加速し、さらに施設規模の縮小を図る.

ここまではポジティブな側面で、特にシステムを難 しくする要素はない.しかし、低エネルギーでは加速 による横方向エミッタンスの縮小効果が小さく、さら に短周期アンジュレータであるため K 値(最大偏向角 と相対エネルギー γ の積)も比較的小さいので、レー ザー増幅にはピーク電流 3 kA 以上、且つ規格化ビーム エミッタンス 1π mm・mrad 以下という高輝度電子ビー ムが必要になる.この高輝度ビームを得るため、単結 晶カソードパルス熱電子銃⁴⁾から出た 1 A の高品質電 子ビームパルスに 2 つの RF ポテンシャルでエネル ギーチャープを形成し、速度変調バンチングにより電 子ビームを圧縮する独自の入射器を開発した¹⁾. SCSS コンセプトに基づく SACLA のシステムを図2に模式 的に示す.

SCSS コンセプトでは,目標のピーク電流生成に必要な圧縮係数は X 線領域でのレーザー生成を目指す場



 図2 SACLAの模式図. EG, 500-kV単結晶カソードパルス熱電子銃; CH, コリメータ付きビームチョッパー; SHB, 238-MHz サブハーモニックバンチャー; BS, 476-MHz ブースター空洞; L-APS, L-band APS 空洞; S(C)-TWA, S(C)バンド進行波加速管; BC:バンチ圧縮器; UND, アンジュレータ; BL, ビームライン; MBS,メインビームシャッター;OH,光学ハッチ; EH, 実験ハッチ.

合,3000 倍以上というとてつもない値となってしまう. 単純な1段のバンチ圧縮器における圧縮係数 $C_{\rm B}$ の位相 変動 $\Delta \phi$ に対する感度 S_{ϕ} は,初期ビームエネルギーを E_0 , 全加速エネルギーゲインを eVcos ϕ として

$$\begin{split} S_{\Delta\phi} &= \frac{1}{C_B} \cdot \frac{\partial C_B}{\partial \phi} = (1 - C_B) \cdot \left(\frac{eV \cdot \sin\phi}{E_0 + eV \cdot \cos\phi} + \frac{\cos\phi}{\sin\phi} \right), \\ \frac{\Delta \sigma_z}{\sigma_z} &= S_{\Delta\phi} \Delta \phi \end{split} \tag{1}$$

と表される. $C_{\rm B} \gg 1$, さらに加速位相 ϕ が極端なオフ クレストではない条件 ($\phi \ll 1$, $\phi \neq 0$) で(1) 式は

$$\frac{\Delta\sigma_z}{\sigma_z} = S_{\Delta\phi} \Delta\phi \approx -C_B \frac{\Delta\phi}{\phi}$$
(2)

の単純な形に近似でき、ピーク電流の変動は圧縮係数 に比例するというよく知られた結果を与える⁵⁾. これ は電圧に関しても同様に似たような形として導くこと ができる⁶⁾. 仮にピーク電流の変動を 10%以内に抑え ようとする場合、フォトカソード RF 電子銃を用いる LCLS⁷⁾ 及び Euro-XFEL⁸⁾ に比べ ($C_{\rm B} = 100 \sim 200$), 一桁以上厳しい位相・電圧安定性が必要になるとの予 想がなされた. そこで設計開発段階での重要なテーマ は C-band 高勾配加速システム開発はもとより, RF 機 器安定度の設計目標設定, RF 機器の設計目標値を達 成するシステム開発, 3000 倍を超えるバンチ圧縮を可 能にする具体的圧縮スキームの開発, バンチ圧縮状態 を診断するシステムの開発等であった.

一方でレーザー増幅を担う長尺アンジュレータにも 課題が多く残されていた. SCSS コンセプトを支える のは真空封止アンジュレータの短周期性である. SPring-8 建設当時(1990 年代)は,32 mm を標準周期 長としていた⁹⁾.高いK値を実現しつつ,磁場精度を 保った状態で、この周期長をどこまで短縮できるかが 1つの大きな開発要素であった. XFEL ではアンジュ レータ磁場の最大許容誤差がきわめて厳しいので, 真 空チェンバーに磁石列を組み込む前に、測定ベンチに て磁場性能を計測し、最終磁場調整を行う従来の方法 では不十分と考えられていた.このため,チェンバー 組み込み後に、高精度で磁場分布を計測する技術と組 み込んだ状況での調整手法も重要な開発項目となった. さらには、ゲイン長が長いので、アンジュレータライ ンに亘り電子ビームとレーザー場の相互作用の効率を 高めるには, SACLA の場合, 総長 100 m を超える 18 台のアンジュレータセグメントをあたかも1台の長尺 アンジュレータとして機能させる必要があり、特性の 一様性と軌道の直線性を確保することが求められた. アンジュレータラインに高精度ビーム位置モニタ(RF-BPM)の設置は必要と考えられていたが、それを用い てどのように±4 μmとも言われる直線性を実現する かの具体策は、SACLA 建設開始前には固まっていな かった.

3. SCSS 試験加速器での実証試験

このようにあまりにも多くの開発項目を持つ SACLA 建設プロジェクトは, 荒唐無稽とも受け取られ, 日本だけでなく世界中で厳しい批判に晒された. 当時 の世界標準と比べて大幅に異なるシステム設計は、「面 白いが、そんなものできるか」というのが大方の見解 であった. そこで SACLA の 32 分の 1, 250 MeV のプ ロトタイプ, SCSS 試験加速器¹⁰⁾を建設し,実際に極 端紫外波長域(EUV)で基本的なレーザー性能の検証 を実施することになった. 電子銃の端から試験加速器 を撮した写真を図3に示す.この試験加速器は全長約 60 m である.加速器の立場で、この性能検証項目をさ らに具体的に表すと以下のようになる. 単結晶カソー ドパルス熱電子銃からの均一円柱ロングビームを切り 出し速度変調バンチングで圧縮する入射器では、相対 論的エネルギー領域(エネルギー~ 500 keV)の電子 ビームを扱う. この操作が電子ビームの質を悪化(横 方向規格化エミッタンスの悪化)させるかという点が 第1の検証項目である。第2は、KEK にて開発された C-band 加速器システムの基本要素¹¹⁾が,その後の実 用化やコンパクト化に向けたシステム改良により実用 に耐えうるシステムに仕上がっているかという点であ る. 第3は、表面粗度や表面抵抗の影響が支配的にな る狭いマグネットギャップを持つ真空封止アンジュ レータを用いて, SASE のレーザー増幅が本当に実現



図3 電子銃の高圧タンクから下流に向かって撮影した SCSS 試験加速器.

できるかという点である.

2005年に SCSS 試験加速器の建設を行い 2005年末 にはビームを加速して1台のアンジュレータからの自 発光を確認した. 2006 年春から SASE レーザー増幅に 向けたビームコミッショニングの準備を進め、その年 の7月に49 nm の波長において SASE によるレーザー 増幅の初観測に成功した. その後. 加速器の安定化や 2台目のアンジュレータ磁場分布を改善するための磁 石列の作り直し等を行い 2007 年の秋にはレーザー出 力飽和の達成並びに出力飽和が途切れることなく連続 的に持続する超安定レーザー増幅状態を実現¹²⁾し, 「SASE は不安定なもの」というそれまでの間違った 常識を覆した. レーザー増幅データを系統的に取得し. 実測した電流分布を用いて実験データを再現する電 子ビーム特性をシミュレーションで注意深く評価し たところ、レーザー部の横方向規格化エミッタンスは 0.7π mm・mrad となった. この値は、電子銃カソード から引き出された電子ビームの規格化エミッタンス 0.6π mm・mrad とほぼ等しく,速度変調バンチングで 100倍(最終バンチ圧縮率300倍以上)という激しい圧 縮を行っても電子ビームのレーザー増幅部において, エミッタンスは劣化しないことが明らかになった¹⁰. C-band 加速システムの加速勾配も目標の 35 MV/m を クリアし、37 MV/m の高い加速勾配にて長期間安定に 運転できることも実証された¹³⁾. 試験加速器はその後 も、EUVのレーザーを実験に提供するユーザー運転を 継続し、それにより、新たな加速器システム構成要素 の開発,シード FEL 開発¹⁴⁾,SASE を利用した実験手 法や安定なレーザー運転の確立等に重要な役割を果た した. ここで得られた経験や情報は全て, SACLAの 設計及び調整に活かされている.

4. SACLA 実現に向けた課題へのアプローチ

試験加速器による実証試験により,当初想定された 課題のかなりの部分が検証されたが,(1)調整を積み 上げられる加速器の再現性と精密調整を可能とする加 速器の安定性の確保,(2)3000倍の圧縮を可能にする バンチ圧縮スキームと圧縮後の電流分布計測システム の開発,(3)調整を効率的に進めるためのビーム制御 系の構築,そして(4)100mを超えて設置された多数 のアンジュレータセグメントが1つの長尺アンジュ レータとして機能する精密調整法の確立の4項目が未 検証のまま残された.SACLAの実現には,これらの 課題を解決する必要があった.

加速器の調整は、電子銃から始まり、最下流に設置 されたアンジュレータに進むまでに少なくとも数週間 以上を要する.このため、前日までの調整結果が次の 日に再現することは調整を積み重ねる上で不可欠であ る.また、パラメータを最適値に追い込むには、設定 の違いを観測量の差として、例えばレーザー強度の変 化として観測する必要がある.加速器の不安定性によ りレーザー強度が変動していると、パラメータの設定 精度はこの強度変動により制限されてしまう.

一番重要なことは、3000倍の圧縮を安定に実現する ための RF 機器の必要性能をどのように定義するかで あった. 目標性能を明確にするため, 空間電荷効果を 無視したモンテカルロシミュレーションを実施し,ピー ク電流変動 (標準偏差) に対する各 RF 機器の感度を調 べた. ピーク電流変動が設計値の10%以内になるよう に、各 RF 機器からの寄与を等分配して、それぞれの 機器の設計目標安定性を決定した¹⁵⁾. このミュレーショ ンにより、3000倍の圧縮のうち、速度変調バンチング が担う約25倍は、レーザーの時間ジッターに吸収され、 ピーク電流への影響が小さいことが明らかとなった. 目標安定性は、LCLS や Euro-XFEL とほぼ同じ、位相 安定性で言えば約100 fs となり、実現可能であること が分かった. それでも, この設計目標値は, 試験加速 器で達成されている性能をさらに3~4倍改善する必 要があった. そこで, RF 加速システムヘタイミング を配信する高精度タイミング系(メタルケーブルから ファイバー長ドリフト補正機構付きファイバーへ)¹⁶⁾, IQ Modulator / De-Modulator による高精度位相 / 電圧 制御及びフィードバックループ¹⁷⁾,電子ビーム基準の 高精度位相計測システム¹⁸⁾, クライストロンモジュレー タをドライブするインバータ充電器の精度向上¹⁹⁾,単 一絶縁オイルタンクを用いた一体型クライストロンモ ジュレータ²⁰⁾等に代表される技術開発を引き続き実施 した.

設計目標の高い増幅利得を得るには、250 MeVの SCSS 試験加速器で達成した約 300 倍のバンチ圧縮率 を一桁以上上回る 3000 倍を超えるバンチ圧縮が求めら れた.バンチ圧縮とは、図4に示すようにバンチに時 間(他の言い方では,進行方向位置)に線形なエネルギー 勾配 (これをエネルギーチャープと呼ぶ)を与え、電磁 石シケインでの行路差を利用し後方の電子が前方の電 子との距離を詰め、時間方向にバンチを縮め密度を高 める操作である、この操作は、時間とエネルギーで構 成される電子ビームの縦方向位相空間内での回転とし て捉えることができ, 高い圧縮比は縦方向位相空間内 でバンチがほぼ直立することに相当する.この際,電 子ビームのチャープが歪んでいると、図から明らかな ように時間方向へ射影した電子ビーム密度、すなわち ビーム電流が高くならないだけでなく、圧縮途中で電 流値が局所ピークを持ち、電子ビーム質の劣化を招く ことになる. そこで 3000 倍を超える未踏の圧縮比を実 現するため、初期の長い電子ビームパルスに電子ビー ム圧縮過程を線形化する補正非線形チャープを導入し, 多段の圧縮プロセスに亘り適切な状態を維持しつつ, 最終段階(バンチが直立する付近)において、必要な チャープの線形性を満たすような新たな圧縮法²¹⁾を考 案した. さらにこのバンチの圧縮状態を、レーザー強 度で間接的に評価するのではなく直接観測可能なよう



図4 4台の矩形偏向電磁石で構成される電磁石シケインにおける圧縮プロセスの概念図(上)と縦方向位相空間における圧縮プロセスの模式図(下).

に, 圧縮終了後の電子ビームの電流分布を垂直方向に 掃引して 10 fsec 程度の時間分解能で観測できる診断シ ステム²²⁾の開発も行った.

試験加速器での調整・運転経験によって、効率的な 加速器の調整には現実の加速器を表す精密模型が不可 欠であることが分かった.しかし,通常のリング型放 射光光源とは異なり、電子ビームは時間方向に一様で はなく、電子ビームの実エミッタンスが刻々と変化す る線形加速器システムをモデル化することはきわめて 難しい、そこで電子ビームのエネルギーが低い領域は 円柱ビームを仮定し、レーザー増幅部の空間電荷効果 を線形力として取り扱った. 規格化エミッタンスを保 存させることで、リング型放射光光源の取り扱いと同 じく横方向位相空間分布を位置(x, y)とその傾き (x'=dx/ds, y'=dy/ds) で, 縦方向の位相空間を電子ビー ムエネルギー E と時間 t で記述する加速器模型²³⁾を構 築した.この模型を実際の加速器と1対1に対応させ ることで、模型に基づく効率的なビーム制御の実現を 目指した.

SASE型の自由電子レーザーの増幅部となるアン ジュレータは、シングルパスでの増幅利得飽和を実現 するため高い性能が要求される.これは簡単に言うと 以下のように表現できる.SACLA の場合 100 m を超 えるアンジュレータラインは 18 台のアンジュレータセ グメントから構成されている.1つのセグメントはア ンジュレータ、位相器、水平・垂直ダイポール補正器 ペア、ビーム位置モニター及び4極電磁石からできて いる.この18台のセグメントが、あたかも1つの長い アンジュレータとして機能するように、各アンジュレー タ磁場を高い精度で合わせ、アンジュレータ間の位相 をレーザー場に対し整合し、全てのコンポーネントを 精密にアライメントする必要がある²⁴⁾.この目標に向 かい、全作業は2つの段階に分けられた.

第1段階は、ビーム調整前の準備である. 18台のア ンジュレータはホールに設置後、その場で Self-Aligned Field Analyzer with Laser Instrumentation (SAFALI) システム²⁵⁾ により磁場分布が計測され、周期磁場の位 相誤差補正が実施された. 同様に位相器も、磁場測定 データからレーザーと電子ビームの位相同期条件が予 め算出された. これらの情報はビーム調整時の初期条 件設定に必要である.

第2段階は、100 m を超えるアンジュレータラインの 精密アライメントである.これは、3次元位置測量に 基づくアライメントから開始し²⁶⁾、振り分け電磁石上 流部に設置したアライメントアンジュレータのX線を 用いた光学アライメント(予想精度数10 μm)²⁷⁾、電子 ビームを用いたビームベースドアライメント (BBA)^{28,29)} を組み合わせることで、100 m を超えるアンジュレータ ラインの電子ビーム軌道の直線からのずれを±4 µm に抑える方針をとった.

第2段階終了後,アンジュレータの高さを微調整す ることでレーザー増幅が得られる想定である.その後 は、レーザー並びに自発放射の特性をプローブに、K 値とそのテーパー(上流からK値を徐々に低減する)及 び位相器のパラメータの精密調整を実施し³⁰⁾,レーザー 性能を目標値まで引き上げることを計画した.

ビームコミッショニングの経過と直面した 問題

SACLA のビームコミッショニングは約4ヶ月に渡 る RF 機器の高出力コンディショニングを経て 2011 年 2月 21 日から開始された. 図5 にビーム調整前に想定 した調整スケジュールとマイルストーンを示す. ビー ム調整は,電子ビームを最終ビームダンプまで加速し て,システムの基本性能の確認を行う「初期調整」と, レーザー増幅を目指した「精密調整」の大きく2つの 段階に分けられる.

初期調整は3月中のフルエネルギー加速達成とアン ジュレータからの自発放射の確認を目標に進められた. モジュレータ用のインバータ電源のトラブルにより遅れ ていたRF機器のコンディショニングをカバーするため, これと両立可能な加速器上流のビーム調整を同時並行 で行った. 電子銃の健全性を確認するため,500 kV で 引き出された電子ビームの規格化エミッタンスを先ず 計測し, 健全な値である1πmm・mradを実測した. 試験加速器で確立した手順に従い³¹⁾,ビームの初期条 件の評価,238 MHz サブハーモニックバンチャー



図5 ビームコミッショニング前に想定したコミッショ ニング手順とマイルストーン. SASE 出力飽和は 10 月まで延びたが, SASE によるレーザー増幅 の初観測まで,コミッショニングはほぼ予定通 りに進んだ.

(SHB) の電圧校正とクレスト位相決定,476 MHz ブー スター空洞の電圧校正とクレスト位相決定,波長計³²⁾ によるバンチアップ信号測定とビーム誘起信号による クレスト位相決定の信頼性評価,磁気レンズの収束パ ラメータ設定と各部でのプロファイル確認等を行い, 第一圧縮器までの加速器パラメータの大まかな設定を 実施した. S-band 加速システムは設計値である-28度 (クレスト基準)に、第2バンチ圧縮器以降のC-band 加速システムは全てクレスト位相に設定しビームダン プへ加速電子ビームを出射する準備をほぼ1ヶ月で整 えた. そして 7.8 GeV まで加速された電子ビームを, 3月23日にBL1の最終ビームダンプまで導いた.電 子ビームの出射を BL1 から BL3 のビームダンプに切 り替え, BL3 に設置された 18 台のアンジュレータの 1台,16番目のアンジュレータギャップを5mmまで 閉め, 自発光を発生させた. この自発光を下流の光学 ハッチの分光器システムに通し、スペクトルを計測し、 0.8 ÅのX線が生成されていることを確認した. この 段階で取り敢えず18台のアンジュレータを所定の ギャップまで閉じ放射を観測したが、レーザー増幅は この時点では確認できなかった.

初期調整ではビームを最終ダンプまで出射すること を目標に、スクリーンモニター等限られた情報をもと にビームの調整を行った.精密調整に向け、RF-BPM やオプティカル遷移放射(Optical Transition Radiation) によるプロファイルモニター(OTR)、電流モニター (CT)等が必要な精度で使用できるように電子ビームを 用いた調整を最初に実施した.その後、図5に示すス テップを踏みながらレーザー増幅可能な高輝度電子 ビームの生成に向けた調整を進めた.ここで問題となっ たのは Coherent OTR (COTR)の発生である.試験加 速器の運転において、今まで一度も COTR を経験して こなかったため、SACLAでも当然発生しないと私た ちは想定していた.ところが実際には、第3バンチ圧 縮器(図2のBC3)以降、極めて強い COTR が発生し、



図6 第3バンチ圧縮器入口(圧縮前)でのOTRによる 正常なビームプロファイル(左)と同じようなプ ロファイルで見えるはずの第3バンチ圧縮器出 口(圧縮後)のプロファイル(右). COTRの強烈 な発光でビームプロファイルが認識できない.

OTR モニターによる電子ビームプロファイルが計測で きない状況となった. COTR によりビームプロファイ ルがどのように見えるかの例を図6に示す. 色々と対 策を考えた結果,現状で直ぐに対応可能な対策として, OTR スクリーンを Ce:YAG スクリーンに取り替え, 蛍 光とOTR の角度発散の違いを利用し、空間マスクで COTR を取り除くことを考えた. 第3圧縮器直下流に 設置されたビーム特性診断エリア内の OTR モニター にこの対策を施し、圧縮後のビームサイズ、電子ビー ムの電流分布、射影エミッタンスの計測を取り敢えず 実施できるようにした.この対策により、3段のバン チ圧縮システムのビーム調整を曲がりなりにも5月初 旬までに終えることができたが、後述するようにプロ ファイル計測に大きなシステマティック誤差が含まれ ており、電子ビームの射影規格化エミッタンスの値は、 この時点では 2π mm·mrad を下回ることは殆どなかっ た、さらに後から分かったのであるが、多段のバンチ 圧縮システムの最終段を線形化するCバンド補正加速 管の位相が設計値-180°から大きくずれていたため, 初段のバンチ圧縮器にあるエネルギースリットをかな り狭めて運転せざるを得ない状況になっていた.

アンジュレータラインの調整では、アンジュレータ放 射を分光し、その強度³³⁾と2次元プロファイルが計測 できた事が決定的に重要であった. XFEL のコミッショ ニングにおいては、加速器とX線ビームライン(所謂 放射光業界では利用系と呼ばれるグループ) 間の連携 がリング加速器以上に効果的であった.一方,アンジュ レータラインのプレアライメント法として期待してい たアライメントアンジュレータのX線を用いる方法は, 残念なことに失敗に終わった. 原因はアライメント用 のピンホールとアラインメントすべき RF-BPM と4 極 の関係が精度良く決まっていなかったためである.皮 肉なことに、ピンホールだけは 100 m に亘り数 10 µm の精度で並べることができた²⁷⁾. 当初は,アンジュレー タラインのビームベースドアライメント BBA (軌道設 定とRF-BPM, 4極電磁石の軸出し)は電子ビームを 用いて実施する計画であった.実際に試してみると, 考えていた BBA 方式は電子ビーム位置を RF-BPM で 測定するデータを使用する限り、矛盾なく収束させる ことができた. ところが RF-BPM で直線にアラインし た筈の軌道は、アンジュレータの自発光の角度(100 m 以上下流での位置) でチェックすると直線から外れて いるという結果が得られた. 色々試しても, 両者を整 合させることがどうしてもできず, プロジェクトとし ての決断を迫られることとなった.結局,より直接的 な観測で誤差混入の可能性の少ない X 線での計測結果

をもとにアンジュレータラインの BBA を実施する方 針転換を行った. 各アンジュレータのギャップ駆動に よる軌道変動を補正するためのステアリング電流テー ブル(以降, ギャップ駆動用補正テーブル)作成, K値 精密調整並びにアンジュレータの高さ調整を順次行っ た後,各アンジュレータの自発光を上流から1台ずつ, 100 m 以上下流に置かれた 2 次元検出器 (Multiport CCD) 上の目標点に入口のステアリングで導く操作を 行い、アンジュレータラインの軌道設定とアライメン トを実施した. アンジュレータ間に置かれた位相器の 設定は、計測ベンチでの磁場測定結果から決められた. 最後に、狭ギャップアンジュレータのインピーダンス による電子ビームのエネルギーロスを自発光の波長シ フトにより計測し、ピーク電流依存のK値テーパー(リ ニアテーパー)を決定して, SASE によるレーザー増 幅初観測迄の加速器の調整は全て終了した. RF-BPM を用いた測定は、結果的にはギャップ駆動用補正テー ブルの作成等非常に限定的で補助的なものとなった.

ここまで調整を行った後、6月7日に、電子ビーム のエネルギーを7 GeV, ピーク電流を約3 kA に設定し、 上流から1台ずつアンジュレータギャップを約4 mm (K値で1.8)まで閉めていった.7,8台のアンジュレー タギャップを閉めた辺りから自発光の中にボヤッと構 造らしきものが見え始め、さらに閉めていくとスク リーンの蛍光の比較的長い発光時間により、図7に示 すレーザーの輝点が常時見えるようになった.この SASE によるレーザー増幅の初観測以降は、レーザー の強度をたよりに、それをとにかく高めるようにあり とあらゆるパラメータの調整を行った.レーザーの強 度は夏前には 30 ~ 40 µJ/pulse まで上がり、そこで頭 打ちとなった.



図7 SASE によるレーザー増幅の初観測時に自発光の バックグラウンドの中に現れたレーザー光の輝点.

夏のシャットダウン期間に、レーザー強度を広い波 長範囲でどのように上げていくかが議論され、先ずは、 加速器を設計パラメータで運転してどうなるかを見る ことになった. Cバンド補正加速管の設定位相を-180° の設計値に戻し、BC1のエネルギースリットを広げた 状態で、レージングパラメータを追い込むためには、 多段のバンチ圧縮システムに亘りエンベロープをある 程度最適化する必要がある. この目的には、レーザー の強度は使えない. そこで調整をガイドするプローブ として電子ビームの射影規格化エミッタンスを用いる ことにした. これを頼りに、バンチ圧縮条件を設計値 に合わせて圧縮後の各段のエミッタンスを上流から 1 πmm·mrad 程度に追い込めれば, 必ずや強いレーザー 増幅が得られ、そこからはレーザーの強度を使って、 パラメータを精密に追い込めるだろうという筋書きで ある. このために Q-Scan 法³⁴⁾ で求めるエミッタンス 計測における誤差を減らし、正しいビームエミッタン スが評価できる測定手法の確立を目指した. 先ず取り 組んだのは、正しいビームプロファイルを測定するた めの COTR 対策である.次に CCD カメラの焦点をス クリーン上に正確に合わせた. 前者についてはプロファ イルが安定して見える様に、ビューポート下流に挿入 する空間マスクの形状を縦長の長方形型から色々と試 してみた. 最終的には図8(a)の水平軸方向に対称に配 置されたアイリスをもつマスク形状を採用した. これ は、電子ビームが垂直方向にディフレクター空洞で延 ばされることを考慮したものである.後者については, 調整を二段階に分けることで、CCD カメラの焦点を高 精度でスクリーンに合わせ込んだ. 図8(b) はプロファ イルモニターシステムの模式図と上部から撮影した光 学系・CCD カメラ部の写真である。先ず、外部光源に よりマスクを取り除いた状態でビューポートからスク



図8 COTR を抑制するためにプロファイルモニター に挿入されたマスク(a)とプロファイルモニター の模式図(b上)と上から撮影した写真(b下).

リーン上に光を導入し、それを用いて CCD カメラの 焦点を粗く調整する.次に、マスクを挿入した状態で、 電子ビームを用いてプリセットしたカメラの焦点をプ ロファイルの幅が最小になるように精密に調整する. このような対策の結果、精度の高い射影エミッタンス 計測が 2011 年の秋に初めて可能になった. Cバンド補 正加速管の設定位相を-180°の設計値に戻し, BC1の エネルギースリットを広げた状態で,BC1から順次 BC3 に向かって、バンチ圧縮器の RF 加速位相をビー ム誘起法で設計値に合わせ込み、収束パラメータと軌 道補正を各段圧縮後の電子ビームの射影規格化エミッ タンスが1π mm•mrad 前後となるように調整を重ねた. その結果,3段の圧縮器を経て電子ビームのピーク電 流が3kAを超えた状態で初めてビームの射影規格化エ ミッタンスをほぼ 1π mm・mrad まで下げることがで きた.

これによりアンジュレータラインの BBA を実施す る基準エネルギー,この当時は7 GeV,においてはレー ザー強度が向上し, 100 μJ/pulse を超え念願の submJ/pulse の領域に入り始めた. ところがこのビームエ ネルギーからエネルギーを下げてレーザー波長を長波 長側に変更してもレーザーの出力が思ったように上が らない. 定性的には増幅利得が上がりレーザー強度は 高くなることが予想されるにも関わらず.結局,短波長, 長波長どちらの側に電子ビームエネルギーを変えても. レーザー出力は低下し,基準エネルギーでレーザー強 度がピークを示す結果となった. 明らかに何かがおか しいのであるが、色々調べても分からなかった、エネ ルギー変更時には、多段バンチ圧縮システム等上流部 は全てパラメータを固定し、加速器の下流部のみパラ メータの変更を行う. もちろん加速管のウエーク場の ビームに対する影響を緩和すべく、加速・減速を組み 合わせ加速器に渡る平均エネルギーが可能な限り高く なるように配慮している. 一方でエネルギー変更に伴っ て,アンジュレータ入口部の条件を固定してもアンジュ レータラインの軌道が変化していたので、最初はそれ をステアリングで補正し、RF-BPM 上で基準軌道へ常 に戻していた. 議論している中で, アンジュレータラ インでこれ程ディスパージョンが大きくなる原因はあ り得ないことに気がついた. 確かに線形ディスパージョ ンの漏れのソースは限られており、個別にその下流で 顕著な漏れのないことは逐次確認していた. そこで, 取り敢えず基準エネルギーでレーザー増幅している状 況から僅かずつエネルギーをずらしてレーザー増幅状 態と RF-BPM の測定値を見比べる実験を行ってみた. レーザー増幅状態が高いまま維持されている範囲で,



図9 レーザー出力飽和に達している波長 1.2 Å のケー スと出力飽和に到っていない波長 0.73 Å のケー スの2 種類のゲインカーブ(黒塗りのシンボル). 白ヌキのシンボルは強度変動を示す.

RF-BPM 上では明らかなビーム軌道の偏差が発生して いた. それを補正して RF-BPM 上で基準軌道に戻した ところ、レーザー強度が低下したではないか. これで 私達は状況を理解できた.結局,RF-BPMの測定値を そのまま正しいとして補正することが、逆にアライメ ントされた状況を崩していたのである.この実験以降, 基準エネルギーでアンジュレータラインをアライメン トした後は、アンジュレータラインのダイポールステ アリングを変更しない取り扱いにした. 唯一の例外は, 各アンジュレータのギャップ変更に伴う誤差磁場の変 化を相殺するギャップ駆動用補正テーブルの修正(高 精度化) であるが、これは基本的に基準のエネルギー で行えば済む話である.この実験以降,ようやく広い 波長範囲でレーザー強度を上げることができるように なった. 2011年の10月半ばのことである. レーザー 出力飽和に達していない短波長のゲインカーブが得ら れたことで,波長1.2Åでのレーザー増幅が飽和に達 していることも裏付けられた.図9に出力飽和に到達 している 1.2 Å のゲインカーブと到達していない 0.73 Å のゲインカーブを合わせて示す. これ以降は, 2012年 3月からのユーザー運転に向け、長期間のレーザー運 転を可能とする安定化やアンジュレータラインの BBA など定期的に行う各種調整の合理化と自動化等を進め ていった.

6. SACLA のレーザー性能

表1に2012年3月時点でのSASE XFELの特性を まとめる.先ずレーザーの強度であるが,図10に示

表1 SACLA のレーザー性能

Parameter	Achieved Value
Pulse energy (mJ)	$0.1 \sim 0.5$
Peak power (GW)	> 10
Intensity fluctuation (%)	$10 \sim 20$
Lasing wavelength (Angstrom)	$0.6 \sim 3$
Spatial coherence	nearlly full



図10 レーザー強度及びその変動とレーザー波長の相 関. 各エネルギーでK値は1.5から2.1まで0.1 ステップで変えて強度とその変動を計測.

すように,おおよそ0.8から3Åの範囲で sub-mJ/ pulse のレーザーを提供可能である.同じ波長であれ ば K 値が大きい (ビームエネルギーが高い) 方がレー ザーの強度は大きくなる.レーザー強度は1.2Åの波 長で約0.25 mJ/pulse まで達している.

レーザーのピーク出力はまだ直接観測されていない. バンチ圧縮後の電子ビームの電流分布の実測データか ら電子ビームのバンチ構造のエンベロープの時間幅は FWHM で 20 から 30 fs である. (1) レーザー場のパル ス幅は電子ビームのパルス幅より狭く,条件によって は半分程度となる,(2) SASE はスパイク構造の時間ス ペクトルを持ち,スパイクのパルス幅はエンベロープ の幅に比べて短い. これらの事実から,レーザーのピー ク出力は 10 GW を超えていると推定される.

レーザーのスペクトルの例を同じ波長の自発光と共 に図11に示す. この例では1.2 ÅのSASEスペクト ルを示した. スペクトル幅は, 自発光に比べ大幅に狭 く,約0.4%(FWHM)であり,この値はシミュレーショ ンの予測と整合している. このスペクトル幅は高調波 (2次光, 3次光)となっても変わらない.

レーザー強度の変動は図10右軸に示すように10から20%の範囲である.図から分かるように強度変動は

波長が長いほど小さくなる傾向があり,波長 2.5 Å 付 近でほぼ 10%へ収束する.

空間干渉性は、今のところスリット間隔 50 µm のダ ブルスリットで干渉パターンを観測して評価しただけ である.計測された干渉パターンからビジビリティが 約 98%と評価された.このことからレーザーのコアは 空間的にフルコヒーレントであることが分かった.ス リット間隔が 50 µm に制限された理由は、実験配置の 制約から、干渉パターンが検出できる条件で決められ た結果である.レーザーの空間プロファイルは図 12 に 示すように分光前(ピンクビーム)、分光後(単色ビーム) 共に、対称性の高い円形の形状をしており、ピンクビー ムでも Kirkpatrick-Baez(KB) ミラーシステムを用いて、 約1×1 µm²のマイクロビームが得られている.これ らの事実からコアの部分のみならず、レーザービーム 全域で空間干渉性は十分高く保たれていると推定され



図 11 10 keV (1.2 Å) でのレーザーのスペクトルと自発光 のスペクトルの比較 自発光のスペクトル強度は 1000 倍にしたもの.



図12 レーザーの空間プロファイル(左)と分光器で分 光後のレーザーの空間プロファイル(右). 波長 は 1.2 Å.

る. 今後,別の観測方法を用いて,空間干渉特性評価の追実験を計画³⁵⁾している.

表2に現状での運転性能を示す. レーザーの繰り返 しは、10 Hz に下げてユーザー運転が行われている. この理由は、繰り返しを上げるとトリップ頻度が増し、 平均トリップ間隔が30分を下回るからである。トリッ プの主原因は、サイラトロンのミスファイヤであるこ とが分かっており、機器インターロックの見直しを現 在検討中である.現状では、ミスファイヤの単一事象 でも加速器の運転を停止するロジックとなっている. 調査の結果、ミスファイヤ後の次のパルスは正常に戻 ることが確認されており、単一事象では機器インター ロックをかけない緩和措置を実施する予定である. こ れにより平均トリップ間隔は大幅に改善される見通し で、この改善の後、順次レーザーの繰り返しを目標の 60 Hz まで上げていく. 一方で, ミスファイヤにより 1~2%エネルギーの異なる電子ビームがアンジュレー タラインへ入射されることになり、これにより実験中 に波長が2~4%異なるレーザーが混じることになる. これらの混入が加速器のビーム制御,並びにユーザー 実験に悪影響を及ぼさないように制御ロジックの修正, 波長のずれたショットを簡単にモニターして処理でき るシステムの準備等を進めている.

サイラトロンのミスファイヤからの復帰は,非常に 早く1分程度でレーザー運転を再開できる.加速管の 放電の場合は,もう少し復帰には時間を要することが 多い.復帰後のレーザー性能の再現性は,極めて良く, 例えば,強度や波長,レーザー位置はトリップの前後 で滑らかに(変動幅の範囲内で)接続できる.実験ユー ザーは,トリップの前後でレーザー特性の違いを気に しないで実験可能な状態にある.

ユーザー実験時の運転は、24時間連続で行われてお り、レーザー性能の維持を目的とした調整は基本的に 実施しない.加速器調整はユーザー実験前に実施し、 あらかじめ必要な全ての加速器パラメータを準備して いる.図13に3日間に亘るユーザー実験時のレーザー

表2 SACLA の運転性能

Parameter	Achieved Value
Mean fault interval @10 Hz(min.)	$30 \sim 40$
Recovery time from the fault (min.)	1
Repetition rate (Hz)	10
Operation mode	24 hrs continuous
K-value change between 1.5 and 2.1	done freely by users
Availability (%)	~ 90
Reproducibility (peak:100%)	60~70



図13 ユーザー運転3日間にわたるレーザーの強度変動.

強度変動とドリフトを示す. この期間の平均トリップ 間隔は約30分であり、レーザーの利用率(有効実験時 間を計画利用時間で割ったもの)は90%以上となって いる.現状ではまだバンチ長制御のフィードバックが 働いておらず、図13に示す程度の強度ドリフトは発生 する状況にある.現在安定化対策を進めている最中で, この夏以降,加速器の安定性が改善されるよう精力的 に取り組んでいる.

ユーザーに提供しているレーザーの強度レベルは, 調整で得られたピーク性能に比べて,60~70%程度の 水準を維持している.レーザー波長変更は2通りの方 法で行っている.大きく波長を変える場合は,一旦レー ザー運転を中止して,運転員が加速器のパラメータを 再ロードしてレーザー特性を確認し実験ユーザーへ レーザービームの供給を再開している.このため10分 程度の時間を要する.一方で,レーザーの波長を微調 する場合は,その微調範囲が設定波長の±20%程度で あれば,ギャップ可変アンジュレータの特徴を生かし, 実験ユーザーが実験の要請に応じて実験ホールから実 施可能になっている.

7. 今後の性能改善

ここ1~2年の短期的なテーマは多岐に渡るが、その中でも代表的なものとして、(1)波長可変範囲の拡大、 (2)レーザーパルス幅の制御、(3)レーザー強度の増大、 (4)加速器の安定化が挙げられる.(1)は現状、波長が 2.5 Å以上になると強度が大幅に下がるという問題が あり、長波長側のレーザー強度低下の原因の究明とそ の対策が急務である.長波長側にも利用実験からのニー ズはあり、強度を維持しながら波長領域を何処まで長 波長側にのばせるのかは重要である.一方で短波長波 長域を拡大するには,電子ビームのエネルギーの最大 値を引き上げる必要がある.この可能性として,現在 利用していない暗電流除去用シケイン部³⁶⁾に,C-band 加速ユニットを増設することを検討している.これに より 0.5 GeV 程度のエネルギー増加が見込めるので sub-mJ/pulse の下限を 0.7 Å まで下げることが期待さ れる.

(2) は圧縮状態もしくは K 値を制御し,ショートパルスを実現するスキームの検討である. この場合,レーザーのパルスエネルギーは低下するものの,よりショートパルスが利用出来るため,一部の実験にはメリットがある.

(3)は2つのアプローチを現状検討している.1つは, 圧縮過程で2次の非線形性まで制御しているスキーム を3次までに拡張することで,電子ビームの線形圧縮 領域を今より拡大し,レーザー増幅に寄与する電子ビー ムの数を増大させるものである.もう1つは,アンジュ レータのK値の上限を引き上げることで,よりレーザー 増幅利得を稼ぐというものである.SACLAのアンジュ レータの現状の最大K値は2.2でギャップとしては 3.5 mm である.機械的にはギャップは2 mm まで閉め ることが可能なので, 3.5 mm の最小ギャップを小さく することでK値を最大で3.2 まで大きくする余地が残 されている.

(4) は現状,入射部の RF パラメータのドリフトが止まらず,多段バンチ圧縮システムの各圧縮器にて,バンチ長のフィードバックをかけられない状況にあり,この改善が緊急の課題である.先ずは,入射器を安定化する必要があり,加速管の精密温調系,低電力 RF

系とタイミング系のラックの温度制御の精密化,タイ ミング系のドリフト補正の導入等幾つかの改善策を並 行して進めている.

長期的な高度化項目としては、(5)X線領域におけ るセルフシードの導入,(6)SCSS 試験加速器の SACLA アンジュレータホールへの移設とアップグレー ド,(7)アンジュレータラインの高速切り替え,(8)ア ンジュレータラインの増設, (9) 軟 X 線領域における シード技術の開発と導入が挙げられる. (5)と(9)はシ ングルモードで時間コヒーレンスのあるレーザーが得 られるため、実験に対するインパクトは大きい.特に(5) は薄いダイヤモンド結晶1枚とシケインというシンプル な構成の透過型という方式³⁷⁾を用いて、LCLS がこの 1月にシード化実験に成功³⁸⁾ しており, SACLA でも 可能な限り早期に導入を図りたい. セルフシードでは, SASE をシードレーザーとして用いるので、強度変動 が大きいと予想され、その変動を抑制する適当な手法 を現在検討している. この夏には、中央のアンジュレー タラインのアンジュレータセグメント18台の内,上流 から9番目を最後のセグメントの後に設置し直し, そ こにシケインを導入して, 自己相関計測系を構築し, 電子ビーム電流分布の精密計測から開始する予定であ る. (7)に関しては、3年後を目処に、今年度から電 源の R&D を既に開始している.

8. おわりに

SACLA の建設と運転は、ここまでは順調に達成されてきた.しかし、加速器は道具である以上、使われて成果が出ることによりその道具の性能にも光が当てられる.SACLA は、この記事でも書いてきたように施設規模縮小だけを単に追求してきた訳ではない.レーザー性能、安定性、機能性、拡張性と実験の利便性にも徹底的に拘ったシステム構築を行ってきた.LCLSとSACLA、そして今後登場してくる新たなXFEL施設で、利用実験がどのように展開されていくのか、どのような成果が出てくるのか楽しみである.SACLAで展開される新たなサイエンスの成果が私達のアプローチの正当性を証明してくれると信じている.

参考文献

- 1) T. Shintake et al., Proc. SPIE 4500 (2001) 12.
- 2) H. Kitamura, J. Synchrotron Rad. **7** (2000) 121.
- T. Shintake et al., Proc. the 1995 Particle Accelerator Conference (1995) 1099.
- K. Togawa et al., Phys. Rev. ST Accel. Beams 10 (2007) 020703.
- 5) M. Dohlus et al., ICFA Beam Dynamics Newsletter

38 (2005) 15.

- 6) H. Tanaka et al., Private Communication.
- 7) J. Arthur et al., SLAC Report 593, 2002.
- 8) M. Altarelli et al., Report No. DESY 2006-097, 2006.
- 9) T. Hara et al., J. Synchrotron Rad. **5** (1998) 403.
- 10) T. Shintake et al., Nat. Photon. 2 (2008) 555.
- 11) 例えば, T. Shintake, Jpn. J. Appl. Phys. **31** (1992) L1567.
- 12) T. Shintake et al., Phys. Rev. ST Accel. Beams **12** (2009) 070701.
- 13) T. Inagaki, Proc. the 24th Linear Accelerator Conference (2008) 1090.
- 14) T. Togashi et al., Optics Express **19** (2011) 317.
- 15) H. Tanaka et al., Proc. the 4th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2007) 613.
- 16) Y. Otake et al., Proc. ICALEPCS'07 (2007) 706.
- 17) H. Maesaka et al., Proc. EPAC'08 (2008) 1404.
- T. Ohshima et al., Proc. the 8th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2011) WEMH05.
- 19) K. Kawasaki et al., Proc. the 5th Annual Meeting of Particle Accelerator (2008) 565.
- 20) T. Shintake et al., Proc. IPAC10 (2010) 3287.
- 21) K. Togawa et al., Phys. Rev. ST Accel. Beams **12** (2009) 080706.
- 22) H. Ego et al., Proc. IPAC2011 (2011) 1221.
- T. Hara et al., Nucl. Instrum. Meth. A 624 (2010) 65;
 Y. Tajiri et al., Proc. the 8th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2011) TUPS051.
- T. Tanaka et al., Nucl. Instrum. Meth. A 528 (2004) 172.
- 25) T. Tanaka et al., Proc. 30th Int. Free Electron Laser Conf. (2008) 371.
- 26) http://www.apisensor.com/tracker3-usa
- 27) T. Morinaga et al., Proc. the 8th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2011) TUPS059.
- 28) H. Tanaka et al., Proc. the 7th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2010) 207.
- 29) R. Yamamoto et al., Proc. the 8th Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2011) TUPS062.
- T. Tanaka, Proc. 31th Int. Free Electron Laser Conf. (2009) 524.
- H. Tanaka et al., J. Particle Accelerator Society of Japan 5 (2008) 237.
- 32) H. Maesaka et al., Proc. the 3rd Annual Meeting of Particle Accelerator Society of Japan (2006) 328.
- 33) T. Kudo et al., Rev. Sci. Instrum. 83 (2012) 043108.
- 34) X. J. Wang et al., Proc. of the 1993 Particle Accelerator Conference (1993) 2486.
- 35) M. Yabashi et al., Private Communication.
- 36) H. Tanaka et al., Proc. of the 23rd Particle Accelerator Conference (2009) WE5RFP051.
- 37) G. Geloni et al., DESY 10-53 (2010).
- P. Emma, presented in IPAC'12, New Orleans, May 20-25, 2012.